

# 21世紀にキリストを生きる

## 21世紀にキリストを生きる

### 21世紀の世界-転換の2010年

#### ＜2010年10月、南アフリカ・ケープタウン、第3回ローザンヌ世界宣教会議参加＞

2010年もあと一か月弱。この一年、自分の生き方を振り返る最大の学びは、何だっただろうか。

私は今年、「声なき者の友の輪」と共に新たな一步を踏み出した。なぜ、今年、この歩みに導かれたのか。10月に世界198か国のキリスト者が一同に集まる会議に参加して、神が世界の視点からその意味を確認させてくださったように思えた。

ケープタウンの会場で行き交う4000人以上の黒、茶、黄、白のあらゆる色調の顔の波を眺めていたら「イエス・キリストこそ、世界のあらゆる民族・部族の人々の主であり、宇宙の創造主とのつながりを回復させてくださった方だ！」ということを実感しないではいられなかった。イエス・キリストは限られた国だけで崇められる神じゃない。全世界の人たちにとって、この方は、心も魂もからだも家族も社会にとってすべての課題に対する宇宙の造り主としての答えなのだ。どこの国でも地域でも、私たちが人として生きるモデルとなられた。聖書でパウロは、キリストに従う者はみな、キリストの体の一部なのだと言説する。その「キリストの体」が世界に広がり、私は現実としての世界大の「キリストの体の凝縮」を味わったのだ。キリストの真摯な生き様と十字架での壮絶な死と出会い、小さな私に示された愛を知った。キリストに従う決心をして30年。世界に広がるキリストの体という生の体験は、頭である主イエスとその「体」として生きる使命をより深く呼び起こしてくれた。

今回の会議では、キリストを信じる一体感のうちにさまざまな場面で、3-6人の小グループで意見交換の場が設定されていた。世界の各地の人々の意見には、人生経験、地域や国の先人たちが築いてきた文化や歴史に育まれたものの見方が反映され、驚くほどの視点の広がりや学びの機会になった。これこそ、エフェソ4章4-7節に示されているように、キリストの体として一つ、霊は一つでありながら、さまざまな恵みを与えられている、ということだと思えた。今年始動した「声なき者の友の輪」では、これからの時代は、世界の人々、キリストの体とお互いから学びあい、差し出しあい、支えあう『相互依存』のあり方を核とすることを打ち出した。すでに、それは現実となっている。今年的一步は、世界を導いておられる主からの呼びかけへの応答の一步であったことを、ケープタウンで確認したように思う。(下：会場風景)



#### ＜21世紀:キリストの体を覆うコンシューマリズム(大量消費促進)社会の挑戦＞

今回の会議では、この時代の世界を支配する流れ、「コンシューマリズム(大量消費促進)」が私たちキリスト者の思考、行動パターンに深く影響していることが多くの立

場から指摘された。強制的経済の平等を目指した「社会主義」は20世紀末に終息し、一人勝ちのようだった「資本主義」は「大量生産・大量消費・大量廃棄」に姿を変え、現代の私たちのライフスタイルになっている。『もっともっと便利で気に入るものがありますよ、お金を持つ消費者が王様ですよ』と言葉巧みにささやきかける社会。自分が欲しいときに欲しいものを手に入れ、したいときにしたいことができる最高！の社会になったのだ。TV、インターネット、雑誌、あらゆる情報によって、キリスト者もいつのまにか、このささやきに洗脳されてしまった。「コンシューマリズム」の前に、キリスト者が「世の光」としての存在する特異性が失われてきたと何人もの方が警告していた。キリスト教会がいつのまにか世に流

され、経済先進国、新興国といわれる国々では、「光」としての影響力を急速に失っている。21世紀始め、キリスト者は世界で、内側からの崩壊という正念場に立たされている、という。

「私が王様」の時代に、キリストが挑戦された「自分を捨てる」、「人のために犠牲を払う」、「私のために命を捨ててくださった方に自分が従属している」生き方とはどういうものだろうか。もし、キリスト者の生き方が時代の課題に対して明快な答えになっていないのなら、まだイエス様を知らない方に理解してもらうのはもっと難しい。キリストに真剣に従うとき、必ず真の平安と喜びがある。その真理の生き方の回復こそ、私たちキリスト者に突きつけられた時代の挑戦だと確認した会議でもあった。

「自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」

二千年前も人はすべてをコントロールする王様でいたかった。真の喜びは逆説的に生きるときに与えられると、真理の方、キリストは宣言した。21世紀の今、この古くて新しい生き方が求められている。

## これからの日本と「声なき者の友」

### <21世紀：次の世代に残すべき社会>

私が20年前の1990年に世界最貧国のひとつだったバングラデシュに出かけたとき、日本は経済的に豊かで欧米と並ぶアジアの成功国ともてはやされていた。けれども、『経済が安定し豊かになれば、人間はもっとすばらしい社会を作り出すことができるだろう。』という考えが幻想だったことをこの20年、経験させられてきたように思う。いつの頃からか「貧しい人たちは互いに助け合い、子どもたちの目は輝いている。それに比べて日本は…」という言葉が聞かれるようになるほど、日本社会に無関心と内向き志向が充満するようになった。

ケーパタウンの会議でも指摘されたが、20世紀の最後と21世紀の始め、「大量消

費促進」を支える「私が王様」思考に洗脳され、「他の人と支えあう社会での生き方」は「自分が王様になれる限られた世界を楽しむ守りの生き方」に取って替わっていった。その一方で、モノと同じように使い捨てられる虚無感に人知れず苦しむ若者たちが無数にいる。世界のグローバル化の流れ中で21世紀の日本社会のあり方の確立は、待ったなしの緊急事態になっていることが、政治、経済、医療、福祉、教育などのあらゆる分野の混迷に現れているように思える。

多分、私たちが問わなければならない素朴で根本的な質問は『何を大切に作る人で満ちた社会を築くのか』という、一致を見出すことがとても難しいものだろう。この質問は、2000年前に地上に生き、命を差

し出されたキリストに出会った者たちに問われたものだ。そして、21世紀にキリストに従っている私にも突きつけられている。私が信じてきたことは何だっただろう。最も大切なものが残る生き方は、『自分を捨てる、人のために犠牲を払う、「私」のために命を捨ててくださった方に自分が従う』というものだった。

日本でも世界でも、私たちに「王様になれますよ」とささやく声を脇に置き、社会に出、目を凝らし、耳を澄ますと、私たちが守ろうと必死になっている小さな世界では聞こえなかった「声なき者」の呻きが聞こえてくるように思う。

先日、「今の時代に自分の子どもたちに何を伝えていったらよいか」についての対話式お話会に招かれた。10人ほどの親ごさん

に世界での経験を話したあと、今の日本の状況をどのように感じているか意見交換をした。その中で「親である自分自身の生き方が、問われている気がする」と口にされた方が何人かおられた。

激動する転換期の日本で、次の世代に残すべき社会は何か。多くの人々が考え始めていることを感じる。その答えは簡単には出てこないかもしれない。けれども、「私は、何を大切に作る生き方をするのか」という問いかけをすることは、大きな前進だと思う。「声なき者の友」は、社会の問題の答えが自分の中、つまり、ものの見方・考え方、行動の仕方、自分が手を差し伸べてみる姿勢にあることに気づいた人たちだ。今年、新たな一歩を踏み出した私が、今、日本で挑戦されている生き方である。

とてつもなく大容量の情報とモノのなかから何でも選べる、したいことをする自由な社会だからこそ、大切なことを見分ける「私の選択力」が問われている。どこに選択の基準を見出そうか。私の好み?それとも「私と隣人」が生かされる変わることをない物差し?

*「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」*

## 「共に喜ぶ」未来をつくる

### <世界：勝負の10年！>

私たちは、これだけ何でも自由に選べる時代に生きてはいるが、自分が置かれた時代を選ぶことはできない。これはこの時代に生かされている、ということだ。この世代に託された「時代の課題」に向き合うように、ということだと思う。

ケープタウンの会議と私自身のこの数年間を「声なき者の友」の視点から振り返り祈るとき、世界の地域と事柄でこれから10年のインプットと支えが、人々のその後を決定づけることが2つ頭に浮かんでくる。

一つはインドのカースト制度で抑圧され世界の最貧困層の大きな一角を作る3億人以上のダリットの人々である。20世紀まで差別に苦しんできた多くの人々が世界で解放を味わった。米国では60年代の公民権

運動によって人権を回復されたアフリカ系アメリカ人から、今、大統領が選出されている。10月に訪問した南アフリカでは80年代まで悪名高いアパルトヘイト（白人優遇制度）が存在したが、不屈の精神の非暴力で闘い続け解放を勝ち取った。21世紀世界に残る慣習上最大の差別対象がインドのダリットたちだ。聖書が宣言する「神の似姿に造られた」人が虫けらのように扱われ、尊厳を踏みにじられていることを見ぬ振りすることはできない。特に、日本の私たちは21世紀の新しい経済パートナー国としてインドに大きな期待を寄せている。10月末には日本とインドの経済連携強化の調印のため首相も来日した。これから数年でさらに深まるインドとの経済関係は、私たち日本人が経済だけを考えて差別する側に与

するのか、差別される側の人権が回復されるように働きかけるかという、全ての国民を尊重する真のパートナーのあり方が問われてくる。21世紀の課題解決の協力者のあり方を自ら選ばなければならないだろう。

もう一つは、アフリカ全域である。21世紀に、貧困、乳幼児死亡率、就学率など最も深刻な状況はアフリカの国々に集中している。と同時に今、それぞれの地域を変えようと立ち上がっている多くの思慮深い若い世代が登場している。アフリカの強みを再生し、利益をより多くの人々と分かち合う、より良い生活に近づく機会を多くの人に提供しよう。この思いで立ち上がった人々が、これから10年さらに増え、アフリカが希望への転換を果たす波がさらに高まるどうか試される10年だ。

#### <日本：グローバル化時代での貢献>

ごく近い未来が「共に喜ぶ」世界に近づくかどうかは、私たち日本人が考える以上に、日本人が世界とどのように関わるかが大きく影響するグローバル化時代であることを忘れるわけにはいかない。人もお金もあつというまにつながる世界で自分の利益だけしか考えなければ、強者の論理で加害者になる。2-3年先の利益からインド。10年先の利益を考えてアフリカへの経済投資が検討される時代だ。経済だけから考えるか、それとも経済とあわせて社会を立てあげる働きを主体的に見つけて応援するのか。日本社会が世界から貢献の国と位置づけられるかどうか、試金石となる10年だろう。

そこで選ぶべき大切な価値観は聖書にある。一人ひとりのキリスト者日本人、そして日本のキリストの体が、家庭でも仕事で

も地域でも全ての領域で、この価値を表わす一貫した生き方が、今ほど望まれているときはないだろう。未来を作る日本の子どもたちも世界の人々も、私たちの生き方を見守っている。「共に喜ぶ」未来が今、神様から私たちの手に託されていることをひしひしと感じる。

2010年のキリストの生誕を祝うクリスマス、新しい2011年を迎えるにあたって皆様と共に静まり、神の変わらない声に聴き従う決心をあらたにしたい。

\*\*\*\*\*

#### 「お祈りください」

■ **世界で勝負の10年**：「声なき者の友の輪」では、現地の方によるインドのダリットの方々の尊厳回復のモデル作りに関わります。神様による導きを見極め、共に学べますように。

■ **日本の若い世代が希望を見出す働きのため**：大量消費社会で自分がいてもいなくてもいいような虚無感を味わう若い世代と「隣人を愛する習慣作り」を通して、21世紀に残すべき社会を築く希望の働きを推進できますように。

■ **日本ローザンヌ委員としての働きのため**：「声なき者の友の輪」の理念を共有するローザンヌ運動の精神「人と社会の全ての回復という全福音を全教会とともに全世界へ」を広げるため、委員の一人に任命されました。主の知恵に導かれますように。

主のお働きを皆さまと共に期待して。

柳沢 美登里

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」(<http://www.karashi.net>)の働きのために、是非、お祈りとご支援をよろしく願いいたします。

郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201

私へのご支援は「柳沢支援」と明記ください。領収書は振込票で代わりとさせていただきます。ご了承ください。主の働きを共に進める恵みを感謝して。